

しいのき



江戸・東京の昔と今

名誉館長 三 隅 治 雄

歌川広重と言えば、「東都名所」「東海道五拾三次」「木曾路六拾九次」などの風景画の傑作のものにした浮世絵師として有名です。その広重が安政5年（1858）9月に急逝する直前まで、3年間にわたって描き続けたものに「名所江戸百景」があります。じっさいには119枚あって、うち4枚は二代目広重の作ですが、これを通観すると、140年余前のわが郷土が、いかに緑多く、水清く、花鳥風月がたのしめ、富嶽が町なかからも仰ぎ見られる美しい風流の地であったかがしのべれます。それにくらべて現在は……というので、今回当館の職員矢島典雄氏が広重の絵と同じ場所を一年を掛けて撮影して歩き、両者を並べての「江戸東京百景今昔展」を開催したわけですが、御覧になっての感想はいかがでしょう。人が何十倍にも増え、家が密集し、ビル・工場が林立する風景を進歩と見る一方で、その代償に自然を削り、大気・水をよごさざるをえない現状に心が痛みます。今後の町づくりを考えさせられる写真展でもあります。

文化財よもやま話

雨 乞 い

今年の夏は冷夏といわれていましたが、実際には連続真夏日を百年ぶりに更新する猛暑となりました。天気を予測することの難しさを実感します。

農業を営むものにとって、作物の育成に適した天候は何よりも代えがたい自然の恵みであり、それはなかなか思うようにはいかない脅威でもありました。一昨年の水不足は私たちの記憶に新しいところですが、水が枯渇し、瀕死の状況の作物に直面した人々の焦りは如何ばかりであったでしょうか。ついに雨乞いをとり行う地域もありましたが、中野でも農業が家々の生活を支えていた頃、雨乞いはたびたび行われる祈りの行事でした。

鷺宮では、上鷺・下鷺でそれぞれ行っていた、かつての雨乞いの様子をお聞きすることが出来ました。下鷺では、晴天が続くと、村の男性がどこで雨が降ってきてもいいようにと蓑笠をつけ、大太鼓を叩きながら列をなし、三鷹市の井ノ頭公園まで行ったということです。その道すがら人々は「ホーホイダンボイ」と山念仏を唱えながら歩きました。片道が約2時間かかり、弁当持参の一日がかりの行事となったそうです。

杉並区と境を接している、上鷺の大境と呼ばれる地域では御嶽神社を祀っていますが、まずはここに人々が集まり、雨が降るまで毎夕雨乞いの祈禱が行われたそうです。また集落のまわりを祝詞を口ずさみながら歩いたりもしました。それでもなかなか雨にならないと、武州御嶽神社まで、村の代表者が足を運びました。井ノ頭公園にも行くことがあったといいますが、遠くに行くことで、大きな御利益を得ることが出来るような気がして、御嶽神社に行くことが多かったということです。時には御嶽神社からの帰り道、追いかけるように雨が山から下りてきて、鷺宮に着いたときは土砂降りだったということもありました。

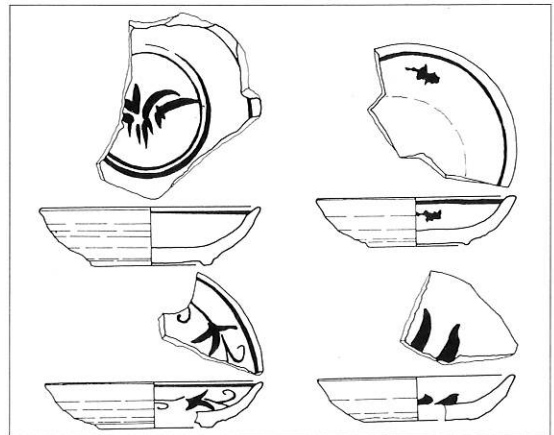
鷺宮には妙正寺川が流れています。そこから田に水を引いていたのですが、日照り続きの水不足、大雨の時の洪水と、生活と水、そして川は、今も昔も変わらない大切な問題です。

大地に眠る歴史

遺跡の年代はどう決めるか

新聞などで遺跡の記事がでると、必ずその時代が話題になります。最近では、何世紀の遺跡というような言い方をしますが、どうしてわかるのでしょうか。これには様々な方法がありますが、代表的な決め方は、製作年代の明確なものを使うことです。ここでは、その一つである、志野焼を例にあげましょう。

志野焼は、瀬戸美濃地域で焼かれた江戸時代初頭を中心に見られる焼き物です。皿が主で、白色乳白色・灰色のやわらかい調子の上ぐすりをかけて茶色の顔料で花や草を描いた、とても親しみ深いものです。



▲御嶽遺跡出土の志野焼(8分の1)

その出現は、大阪堺の遺跡から出土したもののから1585年頃とされていますが、関東地方では天正18(1590)年に落城した八王子城からは発見されていないためこれ以降に広まったと考えられます。

一時は、焼き物の主流として盛んに使われましたが、やがて、九州有田で焼かれはじめた伊万里焼が江戸に大量流入して、人々の需要が高まるとともにすたれていきました。

17世紀中頃にはあまり生産されなくなり、寛文7(1661)年の愛知県穴田窯の廃絶をもって消滅したと考えられます。

このようなことから、17世紀前半を中心として流通したものであることが明らかな焼き物として年代を推定する有力な手がかりとなるのです。

古代発見物語

防空壕の中から人の骨
杭打ちしたら下に空洞が

実は古代の墓地

「裏の畑でポチが鳴く、正直爺さん掘ったらば、大判小判がぎくざく」の童謡にあるように偶然の機会に考古学上の大発見があることもあれば、また、青森市の三内丸山遺跡の例にみられるように大規模な建設工事に伴う発掘調査によって縄文文化への見方そのものが改められることもあります。でも、穴を掘っていたら大判が出て来れば、大喜びですが、「瓦や瀬戸がけ」どころか人骨が出て来たら、欲張り爺さんもびっくりですね。

東中野5丁目で切り立った崖を削って保安工事をしていたときのことで。重機で掘削していると、突然、崖の断面にぽっかりと穴があいたので。工事をしてた人が不思議に思って、穴の中を恐る恐るのぞいてみると、人の白骨が2体、上向きに横たわっていたのです。白骨を目の前にして工事関係者は、これは大変一大事、何だろうか、と話し合った結果、東京大空襲のとき防空壕の中で悲惨な死を遂げた被災者に違いないということになり、近くのお寺に手厚く葬ったそうです。

まもなく、その出来事が区教育委員会に伝えられました。「防空壕の床に小石が敷き詰められていた」という、作業員のひとことが事の真相を明らかにしました。西暦7～8世紀頃の横穴墓だったのです。

さて、それから数年後のある日、警察署から電話がかかってきました。「東中野で家屋の新築工事現場で人骨が出てきたから立ち会ってほしい」とのこと。現場に駆けつけて作業員の話聞いてみました。敷地の整地を行い、杭を深く打ち込んでいると、杭が下にすっぽり落ちると同時に地面に大穴があいて、穴の中に転がり落ちたそうです。そして、穴の中で見たものは、なんと、長々と横たわる白骨だったのです。教育委員会では、新築工事に先だって発掘調査を行いました。やはり西暦7～8世紀頃の横穴墓でした。

偶然の機会に発見された古代の墓地は、図らずも中野の歴史の空白部分に光をあてたのです。

10月1日(日)から開催

第7回特別企画展「江戸・東京百景今昔」

展示とみどころ

震災や戦争を経た今日の東京は、江戸の面影を見ることがほとんどできなくなりました。しかし、私たちは広重によって描かれた『名所江戸百景』によって当時の様子的一端を伺い知ることができます。

①今回の企画展では、『名所江戸百景』とともに大正・平成に同じ場所を撮影した写真もあわせて展示し、江戸・東京がどのように変わっていったか紹介します。

②広重は、交通の要所や盛り場、眺望のよい場所、祭りなどの年中行事を描いています。その独特の構図は、写真の構図に共通する所が多く、1つの特徴となっています。

③また、江戸の暮らしに大いにかかわってきた神田川をたどるコーナーを設けました。場所によって大きく異なる川の景観を見比べて下さい。



▲神田川の水源にあたる「井ノ頭ノ池辨天の社」(左)と、墨田川と合流した「浅草川大川端宮戸川」(右)

※江戸東京百景今昔展は11月18日(土)まで開催しています。また、同展図録も刊行しましたのであわせて御覧下さい。

事業報告

各種事業経過

1995年7月～9月

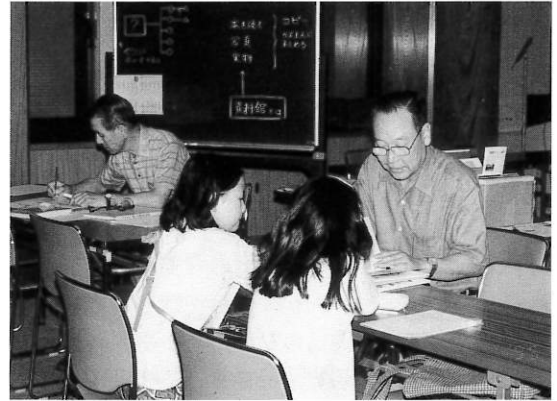
事業名	内 容	期 間
企画展	「戦後50年」今考えれば	7/20～8/31日
歴史講座	人物中野江戸明治	
	「江戸時代の中野を描いた人々」講師 白井哲哉氏（埼玉県立文書館）	7/8
	「神田乃武と桃園町」講師 角田茂氏（中央大学大学史編纂室）	7/15
	「歌川豊国とその栄光」講師 森本順三郎氏（日本浮世絵協会会員）	7/22
	「新井白石と正徳の治」講師 深井雅海氏（徳川林政史研究所）	7/29
	「河竹黙阿弥の世界」講師 三隅治雄氏（実践女子大学教授）	8/5
文化財調査	鷺宮地区民俗調査	継続中
埋蔵文化財調査	御嶽遺跡 整理報告書刊行作業	継続中
	片山遺跡 整理報告書刊行作業	継続中
その他	学芸員実習：7大学8名	7/25～8/6
	郷土学習相談室	8/22～25
	全館消毒・清掃	9/16～20

寄贈資料一覧

1994年10月27日～12月21日

敬称略・受入順

資料名	点数	氏名
千人針	1	小島 満子
引出物入その他関係資料	多数	小西 豊子
オルガン・番傘・蓄音機	3	平井 斉
地図・教科書	多数	井口 正之
戦時中関係資料	20	田中 達男
五月人形その他	多数	塙 百子
羽子板	5	近藤 ヒロ
熊手	1	佐久間 寛
下駄製作工程	一式	大野寿太郎
羽根・羽子板	6	島崎 幸子
乾物屋・炭屋の頃の道具	一式	佐々木泰司
昭和20年代の百人一首	1	酒卷 信子
『燈火』	1	宮本 瑞夫
羽子板	1	竹内 園子
ボーイスカウト手帳・笛	1	本多テル子
手遊び道具	一式	鍋島 保孝
竹細工の道具	6	せ ん
手拭い	多数	矢島 公江



▲郷土学習相談室

入館状況

1995年7月～1995年8月（延51日間）

一 般	社教団体	学校教育	合 計
7,522	136	0	7,658

発行年月日 1995年10月1日

編集・発行  **山崎記念
中野区立歴史民俗資料館**

〒165 東京都中野区江古田4-3-4

☎ 03(3319)9221 FAX 03(3319)9119

(印刷物登録番号 7中教社社第7号)

◎貴重な資料をありがとうございました。厚くお礼申し上げます。